

群馬大学教育学研究科長期研修院

平成 30 年度 活動報告書

令和元年 5 月

目次

| | |
|------------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（国語科教育）平成 30 年度活動報告 | 2 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（社会科教育）平成 30 年度活動報告 | 4 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（数学教育）平成 30 年度活動報告 | 7 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（理科教育）平成 30 年度活動報告 | 9 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（音楽教育）平成 30 年度活動報告 | 10 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（美術教育）平成 30 年度活動報告 | 11 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（家政教育）平成 30 年度活動報告 | 14 |
| 群馬大学教育学研究科長期研修院（障害児教育）平成 30 年度活動報告 | 16 |

はじめに

時代の移り変わりとともに、学校で扱う教科の内容や学校現場自体の課題は必然的に変化していくため、現職教員には「学び続ける」ことが求められます。現職教員の「学び」は県や市町村など行政組織による研修や、現場で蓄積されてきた知識・技能の継承などによって支えられてきました。しかし、組織的な研修では主要な教育課題以外の内容まで網羅することは本質的に困難である上、団塊世代の退職が進んで OJT も機能しにくくなってきています。しかも学校の役割に対する期待は肥大化しており、学校現場は多忙感に満ちています。このように、自由に学ぶ機会も時間も足りない状況の中で現職教員が「学び続ける」ためには、「学び」を支えるしくみの多様化が必要ではないでしょうか。

一方、時代の移り変わりは大学の存在意義にも影響を与えており、特に地方大学には教育・研究だけでなく、地域への具体的な貢献が求められています。群馬大学教育学部および教育学研究科は本務として地域の教員を養成することで地域に貢献してきましたが、さらに地域の“現職”教員に対する積極的なサポートを行うことにより、教育および教科の専門家集団を擁する組織の本質に合った形で地域貢献機能を強化することができると考えられます。また、現職教員との協同の機会が増えることで、現場の課題にこれまで以上に深く寄り添った、教育・研究の新たな展開も期待できます。

そこで群馬大学教育学研究科では、平成 24 年度からオーダーメイド型の個別研修を行う『群馬大学理科教育長期研修院』を理科教育講座に開設しました。さらに平成 26 年度には全 6 分野、平成 28 年度には全 9 分野で研修参加者を受け入れる『群馬大学教育学研究科長期研修院』に拡充して、個別研修や勉強会など、分野の特性に応じた多様な形の研修を提供し、さまざまな分野の「学び」をサポートする現在の体制となりました（担当者転出のため、報告は 1 分野少なくなっております）。

学校現場、大学、お互いの多忙さの中で継続して研修を行うことは決して容易ではない中、大学を充実した「学び」の場にできるように試行錯誤している様子を、たくさんの方に読み取っていただければ幸いです。次年度以降も多様な研修を行い、「学び続ける」現職教員を「サポートし続ける」研修組織を目指したいと考えています。

群馬大学教育学研究科長期研修院運営委員長 佐野 史

平成 30 年度群馬大学教育学研究科長期研修院 分野（担当）一覧

| | |
|-------------------------|--------------------------|
| 国語科教育（国語教育講座 濱田 秀行准教授） | 美術教育（美術教育講座 茂木 一司教授） |
| 社会科教育（社会科教育講座 青山 雅史准教授） | 家政教育（家政教育講座 前田 亜紀子准教授） |
| 数学教育（数学教育講座 山本 亮介准教授） | 障害児教育（障害児教育講座 霜田 浩信教授） |
| 理科教育（理科教育講座 佐野 史教授） | 教育臨床（教育臨床総合センター 黒羽 正見教授） |
| 音楽教育（音楽教育講座 菅生 千穂准教授） | |

群馬大学教育学研究科長期研修院（国語科教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（国語科教育）の概要

国語科の授業づくりに取り組む現職教員が研究者と共に子どもの学びについて理解を深める協働の場である。活動のひとつの柱は、授業事例検討会を設定し、小中高等学校で国語を担当する教員と国語教育講座教員とで国語科の授業実践事例に基づいて議論を行うことを通して、参加者が「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について理解を深め、それぞれの実践の質的な向上を図ることである。もう一つの柱は、実践研究の支援である。国語の授業づくりにかかわる実践研究を行いたいという要望にオーダーメイドで答える個別研修を提供する。

2：活動実績

本年度も、前橋市の小中学校の先生方を中心とする「授業に学ぶ会」と連携を図りながら活動を行った。研修会を実施した日時とそのプログラムは次のとおりである。

| | | プログラム | 参加者 |
|-----|--------|---|-----|
| 第1回 | 5月19日 | 【研究発表】 赤城北中学校校長小倉弘之先生「『学びの共同体』モデルから見た若手教員の現職研修のあり方についての考察」 【授業事例からの学び合い】 前橋市立永明小学校5年国語（「なまえつけてよ」）林千枝先生 | 8人 |
| 第2回 | 6月16日 | 【授業事例からの学び合い】 附属小学校6年国語（「きつねの窓」）桐生直也先生 | 11人 |
| 第3回 | 7月28日 | 【映画上映会】 「みんなの学校」 | 41人 |
| 第4回 | 10月20日 | 【授業事例からの学び合い】 先進校小学校6年算数附属小学校6年国語（「『鳥獣戯画』を読む」）桐生直也先生 | 13人 |
| 第5回 | 12月18日 | 【授業事例からの学び合い】 藤岡市立小野小学校1年国語（「くじらぐも」）田中優花先生 茅ヶ崎市立浜之郷小学校6年国語（「時計の時間と心の時間」）麻生先生 | 22人 |
| 第6回 | 3月9日 | 【講演】 新潟大学一柳智紀准教授「一人一人の子どもの学びを大切にしたい授業づくり～コミュニケーションの質に着目して～」 【授業事例からの学び合い】 前橋市立永明小学校6年国語（「長ぐつのなかの神様」）林千枝先生 太田市立城西小学校1年国語（「おてがみ」）高橋英里先生 | 22人 |

研修会は、基本的に土曜の午後にC棟1階の教室で実施した。第3回は特別企画として、映画「みんなの学校」の上映会を行った。41名の参加者があった。第6回は特別に新潟大学より教室談話分析の専門家である一柳智紀先生をお招きしてご講演をいただいた。この会だけ、午前・午後を通して研修会を行った。6回の研修会の述べ参加者数は117人である。

【第5回の様子】



【第6回の様子】



3：今後に向けて

活動を通して実際の教室における子どもの学びの実態から国語科の学習指導のあり方について検討を重ねてきた。本年度は、facebook や研究室 HP を入り口に参加される先生が複数いらっしゃった。また、過去、この会に学生として参加していた本学卒業生で現在の自分の授業実践を事例として提供して下さる方が出てきている。研修院（国語科）が、現職の先生の学びの場としてだけでなく、学生の学びが地域の教育実践とつながる場になりつつあるのは嬉しい限りである。なお、毎回の授業検討会に際し濱田研究室の所属学生が授業映像から談話記録を作成し提供してくれている。この資料により、毎回の議論が子どもの学びの姿に即したものとなっている。今後も、このような互恵的な関係を継続していきたい。

群馬大学教育学研究科長期研修院（社会科教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（社会科教育）の概要

社会科の内容は時代の変化と共に、また社会諸科学の発展と共に大きく変化している。社会科の教員は教育現場で研鑽を積むだけでなく、時代の変化の中で、また社会諸科学の発展と共に、つねに高度な学び続けることが求められる。群馬大学長期研修院（社会科教育）では、そうした社会科の現職教員の学びを支援するために、地理、歴史、公民、社会科教育の各分野の特色を生かして、大学院レベルの研修を開催している。

2：活動実績

【社会科教育分野】

日時：2019（平成 31）年 2 月 2 日（土） 16:00～17:00

会場：群馬大学教育学部 A 棟 311 教室

参加：計 13 名（教員 2 名、学部生 6 名、大学院生 2 名、県内小中学校教員 3 名）

内容：「地理教育における多様性の扱い—多文化地理教育に向けて—」と題して、本学社会科教育担当の宮崎が、日本社会の多文化化への対応に向けた地理教育のあり方について、カナダの事例を参考に、報告を行った。また、多様性を考えるための身近な地域にある景観写真の資料などを提示し、フォトランゲージの手法を取り入れながら、多文化地理教育実践に向けた活動も行った。全体討論においては、現在の日本の地理教育では、世界の多様性を認め、文化衝突・摩擦を乗り越えた国際理解・国際教育が重視されており、今後の地理教育においては、国内における多様性にも目を向け、マイノリティや自らの文化のハイブリット性への着目させるような実践を行うことが、地理領域科目における多文化教育実践への第一歩であることが確認された。課題としては、現行のカリキュラムでの多文化学習の位置づけ方や、マイノリティや文化のハイブリット性を扱う際の配慮事項を定めていくことの必要性が挙げられた。地域の多文化化への対応は、県内の学校においても重要な課題である。今後も県内の教育的課題に応じたテーマを設定し、実施していきたい。

【地理分野】

趣旨：身近な地域をフィールドとして、地域を捉える視点を学び、地形図の読図能力の向上と地理的な見方・考え方の育成を図る。

内容：総社地区をフィールドとしたロゲイニングを行い、総社地区の地理・歴史・文化などを知る。

日時：2019年2月9日（土） 13:15～15:45

集合：前橋市総社公民館前

参加：8名（関戸、青山、小中の教員3名、院生1名、学部生1名、その他1名）

13:15～13:30

総社地区の歴史地理とロゲイニングの方法を解説した。

13:30～15:30

ロゲイニングの実施。ロゲイニングはフィールドに設置されたチェックポイントをできるだけ多く制限時間内にまわり、獲得した点数を競うものである。今回はポイントを示した1:25,000の地形図

とその地点の写真一覧を参加者に配布した。ポイントへの到達は参加者が撮影したデジタル画像によって確認した。

15:30～15:45

得点集計後、参加者による意見交換、アンケートへの記入・回収を行った

<参加者の感想>

総社地区の歴史を知ることができた。チェックポイントのほかにも、工場や商業施設など、町の様子を知ることができ、車で行けない場所へも行けてよかった。

総社地区にたくさんの文化財があって驚いた。チェックポイント同士の距離が長すぎず、思いのほか遠くまで行くことができた。

地域の様子について、普段では気づかないことを発見することができた。遠見山古墳が発掘中で、葺き石などが見られてよかった。現地踏査でわかるものを発見できた。

総社の歴史と地形を歩いて見て回り、楽しく学ぶことができた。微地形と水路の関係など非常に興味深く学ぶことができた。

<授業への活用について>

地域を知る学習で活用できると思う。もう少し狭い範囲で実施すると学校でも活用できると思った。地図を見ながら歩くことで、地図活用の技能を身につけさせる授業展開が可能だと思った。

小学校1年生の学校探検スタンプラリーで使えるのではないかなと思う。6年生が写真を撮って、1年生が回ると、小学校でもできそう。

用水と地形の関係を使えばよいと思った。石棺の写真を見せて古墳に興味をもってもらいたい。

地形と水路の関係は、授業・巡検に活用できる。歴史的に古代から近世まで幅広く学べ、地域学習に適した地域だと思う。

【公民分野】

日時：2019年2月9日（土）16:20-17:20

会場：群馬大学教育学部大会議室

参加：現職教員6名、学部学生30名、大学教員3名

群馬県立沼田高等学校の峯川浩一教諭から、「高校における主権者教育の実践に関する報告～主権者教育の第2ステージへ向けて～」と題して、ご自身の授業実践についてご報告いただいた。

周知のように、2015年の公職選挙法改正により選挙権年齢の引き下げが実現したことにより、18歳に達した高校生が選挙権を手にするようになった。これを機に、高校での主権者教育が重要な課題として意識されるようになり、峯川教諭の勤務先を含む数多くの高校で、選挙管理委員会との連携により模擬投票と選挙ルールの指導を内容とする主権者教育が行われた。峯川教諭によると、生徒からは、投票は予想以上に簡単だったといった感想が聞かれ、主権者教育の導入としての有効性が確認できたとのことである。また、国政選挙に際しての政党間の政策比較の実践（外部講師による出前授業）については、生徒に特に自分が関心を持っている2～3分野に着目して公約を比較させることで生徒にとってのハードルが低くなり、選挙を身近なものと感じさせることができたという。

峯川教諭は、これらの実践に続く第2ステージとして、地方議会議員の選挙にかかわる取り組みを企画し実践した。学校の所在地である沼田市の市議会議員20名全員を学校に招き、2年生全員（約160

名)との意見交換会を開いたものである。6件のテーマを設定し、各テーマについて議員3~4名と生徒20数名で意見交換を行った。この取り組みを通じて、生徒が政治を身近なものと感じるようになったとのことである。

この報告を受けて、小中学校の教諭から、それぞれの校種・学年に応じた課題について発言があり、参加者の認識を深めることができた。

【歴史分野】

日時：2019年2月10日(日)16時00分~18時00分

会場：群馬大学教育学部C棟106教室

参加：学内外総勢12名

講演：戦後日台・日華関係史研究の現在

講師：森 巧(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

コメンテーター：歴史教育の立場から 今井就稔(本学東洋史研究室教員)

コメンテーター：台湾人留学生チューターを経験して 高橋彩也佳(本学社会専攻4年)

台湾は日本人に人気の渡航先ですし、近年では日本にやってくる台湾からの旅行者や留学生も増えています。中学校までに習う歴史・地理の内容のなかでは台湾に関する事項を見てみると、全く記載がないこともないのですが、双方の交流の活発さに比べるとその扱いは意外と多くありません。そうならざるを得ない背景には、戦後における日本-台湾関係の複雑な過程も一因として存在しています。今回は、戦後の日台関係の基本的なあゆみを概観しながら、日本にとっての「外国」とは何か、「冷戦」とは何だったのかをみなさんと考えてみたいと思います。

群馬大学教育学研究科長期研修院（数学教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（数学教育）の概要

長期研修院の母体となった研究会として、数学教育講座は、20年程前から月に1度、現職教員、修士課程学生、大学教員が、算数・数学教育の学びの場として群馬大学に集い、研鑽を続けてきた。当時、小関熙純教授が発起人となり、長く継続した研究会である。様々な都合で数年前に休止したが、この長期研修院の形で復活した。以下その目的を数学科ホームページより引用する。

— 数学に携わる教員を支援し、現職教員が自らの造詣を深めたい数学の内容について大学の設備を利用して大学教員と協同して学ぶ研修の場として数学科研修院を置く。現職教員および数学教育講座教員が定期的集まり、算数教育、数学教育に関する実践の報告や課題を発表し、数学教育の現場での授業改善や継続する研究を目指す。そしてそのバックボーンとなる現職教員の数学能力の開発を目的とする。—

2：活動実績

数学科研修院：全5回

開催場所：群馬大学教育学部 N 棟 109 教室

今年度も、各月末の金曜日、19時から21時の2時間、長期研修院の具体的な活動として、研究会を実施した。現職教員のもつ算数・数学教育における課題や問題点に、引き続きオーダーメイドで応えるべく活動を継続した。現職からの問題提示や疑問点のみならず、大学教員からの話題提供も継続している。

以下は、各回における話題提供者（発表者）とその課題のタイトルである。

第1回 5月25日（金）19:00～21:00

担当：澤田麻衣子

参加者：16名

1. 畔柳裕太（群大教育大学院 修士2年）
「数学的概念の伝達に伴う二重の困難性の研究」
2. 澤田麻衣子（群馬大学教育学部）
「算数・数学の教材づくりについて考える」

第2回 6月29日（金）19:00～21:00

担当：照屋 保

参加者：17名

1. 篠塚 拓也（群大教育大学院 修士2年）
「理数教育における仮説形成型問題解決」

2. 照屋 保 (群馬大学教育学部)

「算数教育における円の面積の求め方についての一考察 ～ 一様収束関数列の落とし穴 ～」

第3回 10月26日(金) 19:00～21:00

担当：山本 亮介

参加者：15名

1. 富澤 茂 (孺恋高校 / 群大教育大学院 修士2年)

「高校数学科におけるオープンアプローチについての一考察」

2. 山本 亮介 (群馬大学教育学部)

「三角形の合同条件の証明」

第4回 11月30日(金) 19:00～21:00

担当：伊藤 隆

参加者：15名

1. 過外正律 (前橋市立第三中学校)

「数学を日常生活に生かす ～三平方の定理の利用場面で式を読む活用を通して～」

2. 伊藤隆 (群馬大学教育学部), 木村謙太郎 (群馬大学附属中学校)

「中学校数学で円周率を求める授業実践 ～アルキメデスの方法～」

第5回 1月25日(金) 19:00～21:00

担当：石井 基裕

参加者：14名

1. 畔柳裕太 (群大教育大学院 修士2年)

「音律の歴史と数学」

2. 石井基裕 (群馬大学教育学部)

「無限について -中学生に向けた集合論入門-」

3. 交流会

3：今後に向けて

下記 URL で、今後の活動をアナウンスする予定である。

<http://math.edu.gunma-u.ac.jp/math-kensyuin.html>

群馬大学教育学研究科長期研修院（理科教育） 平成 30 年度活動報告

1：群馬大学教育学研究科長期研修院（理科教育）の概要

「理科」という教科は、その基盤となる科学や科学技術が日々変革を伴うものであるとともに、授業の中で行う観察・観測・実験の技能の維持や更新が日々必要となるため、「学び続ける」必然性が高い教科である。群馬大学教育学部理科教育講座では「群馬大学教育学研究科長期研修院（理科教育）（旧名称：群馬大学理科教育長期研修院）」を平成 24 年度から開設し、理科に携わる現職教員が理科の授業に還元できる発展的な内容を研究できるように、講座教員と協同して行うオーダーメイド型の個別研修を主軸として活動を行っている。研修内容は授業用の教材開発がメインとなっている。

2：活動実績

平成 30 年度は 14 件の個別研修を行った。新規受け入れは 3 件であった。また、イベントとして群馬県高等学校地学部会との合同セミナーを行った。

<イベント>

第六回合同地学セミナー

日時：平成 30 年 8 月 17 日（金） 13:00～15:30

場所：群馬大学教育学部地学実験室

参加者：9 名（群馬県高等学校地学部会員 6 名、元研修院メンバー 1 名、群馬大学教育学部教員 2 名）

群馬県高等学校地学部会と研修院（理科）が合同で行う地学分野のセミナーの第六回を開催した。今回は「乾燥断熱減率」をテーマに、まず研修院の現メンバーでもある高校教員が話題提供を行い、原理を理解するための実験として地学基礎の教科書に記載されている方法で実際に実験を行い、この方法の課題について全員で協議した。次に大学教員が自らの授業で実施している実験方法の紹介を行った。乾燥断熱減率を生徒が実感をもって理解する方策について学びあう機会となった。



3：今後に向けて

理科専攻の、特に大学院修了生の参加が増えてきており、養成段階から研修までを請け負うという、教員養成の研究科としては好ましい状況に近づいている。また、実際の授業や理科部の活動などに活用できる教材も生まれてきたが、研修院の参加者や関係者内に情報が留まりがちであるため、次年度は情報を研修院関係者以外に広めていく方策を考えたい。

群馬大学教育学研究科長期研修院（音楽教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（音楽教育）の概要

音楽分野の長期研修院は、現職教員が大学の教員や施設をリソースとして「学び続ける教員」の多様化する学びのニーズに応える研修の場を提供することを理念としている。より高くバランスのとれた専門性を備えることが優れた音楽教員の資質といえるが、大学で学修した専門分野の研鑽を継続することでさえ多忙な教員には難しく、更に必要と考えられる専門外の分野について学ぶチャンスは少ない。そこで本研修院では、個別の要望に応じた研修のほか、広くリソースとして活用可能な講習会・発表会形式での全体研修（公開）を行なっている。

2：活動実績

平成 30 年度の主な活動は以下の通りである。

1) 論文投稿：小学校音楽科「金管アンサンブル」鑑賞教材の作成と実践検証（H29 年度研究）

昨年度行った研究についての論文を「教育実践研究」に投稿した。H28 年度に行った「木管五重奏の教材化」の研究を踏まえて、金管楽器を用いたものに応用した。教材作成にあたり研修院参加の高校教員二名が編曲を行い、それを中学、高校教員による金管アンサンブルで演奏し、録画収録した素材をもとに鑑賞教材を作成した。授業実践は、教材の作成者とは異なり、経験年数の豊かな教員や地域や児童数の異なるクラス（小学校 3 校）で実施、検証した。

2) ゲスト・アーティスト演奏会（アダムス州立大学よりゲスト 2 名を迎えて）

2018 年 12 月 20 日（木）16:30-17:30

教育学部 F-220 教室

参加人数 18 名（うち県内教育関係者 2 名，本学教員 3 名）

海外からの招聘研究者により、学部生に室内楽演奏指導が行われ、その成果発表として演奏会を開催した。ゲスト・アーティストと学生が共演する場面もあり、現職教員を含め公開研修と位置付けた。

TRACY DOYLE (コンサート)
ADAMS STATE UNIVERSITY (米・コロラド州)
トレイシー & ジェイムス
ドイル氏 を迎えて
室内楽 発表会 & ミニコンサート
日時
2018年12月20日(木)
16:00-17:30
場所 F-220 教室
公開講座
19日(木) 夜 夜話 Round Table Talk



3：総括および今後に向けて

2年間にわたり、若い現職教員とともに教材研究を行い、それを現場で授業実践として検証するプロジェクトを実施できたことは、本研修院の役割として意義のあるものといえる。授業実践等の多くの場面で教職大学院の矢島正教授にご指導頂き、分野・専攻を横断的に扱いつつ現場にも実践協力を得たことにより教員研修の質が深まった。関係各位に感謝申し上げたい。今後は、このような取り組みや情報が、より多くの教員に共有される機会を増やしていく必要がある。来年度は、音楽での受け入れ分野が拡大する予定もあるので、他領域の研修院活動を参考に、現職教員が定期的に情報交換、共有できるような機会を設けていきたいと考えている。

群馬大学教育学研究科長期研修院（美術教育） 平成30年度活動報告

1：長期研修院（美術教育）の概要

群馬大学教育学研究科長期研修院（美術教育、以下美術教育研修院と略）は、いわゆる教員養成教育の in-service 教育に対応した実践的な課題解決型研修を目指すものである。知識が急速に陳腐化する「知識基盤社会」において、アート活動も例外ではない。アートは作品(モノ)からアイデアや制作プロセスを含む出来事(コト)に変容し、参加体験型のワークショップアートや長期に渡って展開されるプロジェクト型アートも盛んになっている。同様に、デザインも WEB をはじめとして、情報そのものを対象に活動が展開されるなど、既存の(広義の)アート領域は拡張を続けている。現職美術教師に必要なイノベーティブな知識・技能は常に補強され続ける必要があり、特に ICT をはじめとする新しいデバイスやさまざまなメディア(材料/素材)の進化には緊要に対応の必要がある。

美術教育研修院の最大のメリットは、図工・美術教師等が現場で「困っていること」「伸ばしたいこと」を抽出し、自分の興味関心に基づいて、研修の場で解決やスキルアップを図っていく能動的な研修制度だということである。長期研修院参加者は自己の課題をみつけ、専門領域(アート)と教育を有機的に結び付け、より具体的に学校カリキュラムや題材開発に結びつけることのできる能力を研鑽する。また、このプログラムでは美術教育講座の教員は支援者と同時に研修参加者と協同的な学習者になる。ともすると大学教員(教育)は学校教育現場とかけ離れた教育に陥りがちであるが、研修院参加教員などとのコラボレーションは教員養成にリアリティを取り戻し、現行美術教師教育カリキュラム=在学生たちに還元できるというよい循環を生み出すことである。

学校や社会は今たいへん厳しく、場合によっては(広義の)教師を押しつぶしてしまいかねない状況をつくりだしてしている。そういう多忙な現場であっても、いっとき真剣に学問・芸術に向き合い、本音で教育について議論し、考えられる場を持つことは現代の教師には不可欠である。未来をつくる教育を担う創造的で想像的な教師教育にはすべての叡智の結集が必要であろう。

また、本長期研修院(美術教育)では、教員だけでなく、アーティストや保健師などの職種の人材も受け入れており、フォーマル教育とインフォーマル教育を架橋/越境する活動にも力を入れている。

2：活動実績

今年度は、研修院参加者の拡張を図った。新たに1名(深須砂理：高崎市立国府小学校)の入会があった。

活動としては、個別の指導の他、以下のように研究発表会を実施し、好評の内に終了した。

- ・2019年3月3日(日)群馬大学教育学研究科長期研修院(美術教育)成果発表会
於教育学部C204教室(参加者95名)

題目

①知的障害者施設におけるアートワークショップを通して拓がる利用者や職員等の可能性 木村祐子

- ②アーティスト・イン・スクール(AIS)の挑戦 II～2年目の取り組み 課題と成果～ 鈴木紗代
- ③造形遊びや鑑賞領域において主体的な活動を生み出す指導力の向上 藤原秀博
- ④「学校」という場を生かした題材の開発と実践 教科横断的な授業題材の開発と実践 茂木克浩
- ⑤教科横断的な授業題材の開発と実践 渡邊 彩。

⑥美術教育を専門とする小中学校教員による協同研修 一ぐんびけんグループ展「ビジュツノセンセイ vol.03」開催報告より― 井上昌樹

⑦図画工作科における特別支援教育の視点をもとにした手立ての実践 大塚裕貴

⑧国際理解・交流を目的とした二カ国間の図画工作表現鑑賞題材の提案と実践 亀井章央

⑨寄木技法を用いた抽象彫刻の制作 深須砂里

⑩校壁をまたいで活動する放課後美術部の試み 塩川 岳

なお、これらの発表を2グループに分けて、それぞれテーマを決めてシンポジウムを行った。



◎シンポジウム1『児童生徒が主体的に学ぶことのできる図工美術教育はどうしたら可能か?』(木村、鈴木、藤原、茂木、渡邊) 司会：林教授

◎シンポジウム2『教育現場で図工美術教師は図工美術教育研究をどうしたらいいのか? 自己研修と研究ネットワークづくりについて考える』(井上、大塚、亀井、深須) 司会：喜多村准教授

※発表会については報告書有り。

その他に、茂木克浩・茂木一司、中学校美術科教育におけるPBL型学習の再検証-インクルーシブデザインの視点から、群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編 第54号、17-34、2019、住中浩史・鈴木紗代・小田久美子・茂木一司、アーティスト・イン・スクール(AIS)の挑戦 II-AIS 二年目の取り組みと課題、アーティストと美術教師の関係性の分析より-、美術科教育学会第41回北海道大会発表(2019.3.26、於札幌大谷大学)などの個別の成果もある。

3：総括と今後の課題

研修院も6年目になり、研修院生も増え、活動の充実が見られる。毎年実施している研修成果発表会は学生の教育ばかりでなく、外部へ波及し、参加したいという問い合わせも多方面からあり、事業の周知が広がったことを証左している。

しかしながら言い続けている、全体としての教員養成制度としての in-service 美術教育が不十分であることは改善されていない。教師の業務負担増によって戦後の(美術)教育を発展させてきた自主的な民間美術教育研究会への出席などにも制限がでており、(美術に限らないが)教科の教育を支える専門性の学習が等閑視されたまま、教師/教育が教育方法(よい授業の作り方や教え方など)に還元されようとしている現状には憂慮を感じる。修士課程が廃止され、教職大学院設置へ一本化され、実務者に求められる実践訓練によるようになることへの影響は多大と考える。むしろ、卒後の教員の研修制度でもっとも重要なのは、自由な美術教育研究が保証されるかどうかであり、本研修院制度はその役割におおいに貢献していることは違いないが、それが本学教員の個人的努力によ

ってしかまかなわれえないことには問題があるだろう。

美術科教育教員の専門性の卒後研修による質的保証と教師の多忙さや孤立感に対するストレスマネジメントに本研修院が心的ケアの場にもなっていることは相変わらずであるが重要なポイントである。

本研修院から独自派生した、美術科教育研究集団（ビジュアルノセンセイ）は3年目になって、展覧会の場所を拡張し、群馬県の美術科教育の活性化に強く貢献している。美術教育を表現として捉え、展覧会という手法で成果を問うことは、図工美術教育が主体的で能動的な学びであることを主張する機会になっている。

群馬大学教育学研究科長期研修院（家政教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（家政教育）の概要

家政教育専攻の長期研修院は、学び続ける資質能力を有する教員の養成および支援の場を家庭科教員に提供することを目的としている。平成 25（2013）年度から、高等学校家庭科教員を対象に年 1 回の勉強会を実施し、徐々に中学校および特別支援学校教員にも参加を呼びかけ行ってきた。

2：活動実績

日本の伝統的な和服のよさについて、実践的・体験的な活動を取り入れながら学習し、体験したことを言語化する活動から、伝統や文化を尊重する態度を育てる効果的な授業が求めている。しかしながら、きものが日常着ではなくなった現代、教員側における指導の不安や教材の確保の困難さがあり、授業への導入例は少ない。そこで、ゆかたの着装を軸とした衣生活領域の授業実践について、大矢幸江先生にご講演頂いた。

また昨年引き続き、高橋先生による授業実践ワークショップとして、持続可能な社会の視点から食生活と環境のかかわりについて考えさせる授業や、「家って何のためにあるの」「家だからできること」を生徒に考えさせる具体的な住生活の授業例をご紹介頂いた。さらに道徳研修の一部として、寸劇仕立ての授業を参加者で行った。これは、生徒との信頼関係が構築された上で展開できるものと痛感した。

当日は、高等学校、中学校および特別支援学校から 12 名の教員と群大家政専攻の大学院 1 年生、学部 2～4 年生の 19 名が参加した。

記

「学び続ける家庭科教員のための勉強会 2018」

日 時：2019 年 2 月 10 日（日）13:00～16:00 会 場：群馬大学教育学部 C 棟 206 教室

内 容：13:00～14:30 講演：「ゆかたの着装を軸とした衣生活領域の授業実践」

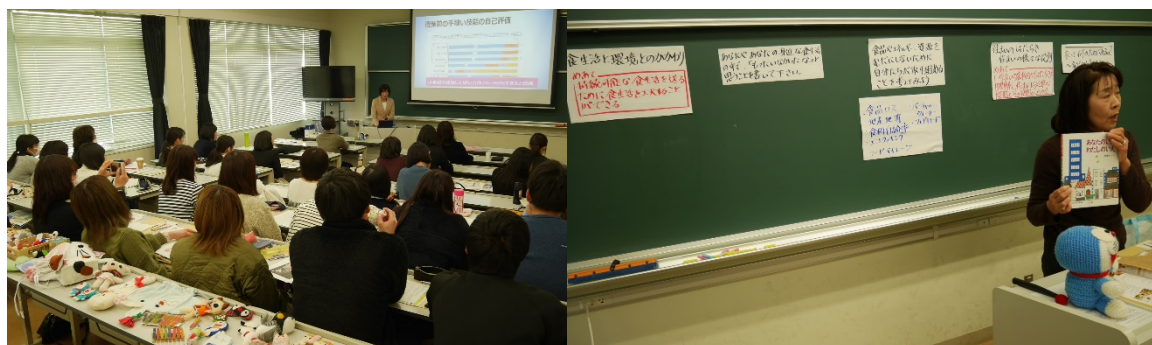
大矢幸江先生（山梨県立大学非常勤講師）

14:30～14:40 休憩

14:40～15:40 ワークショップ：「中学校家庭科実践の工夫とワークショップ（2）」

高橋一美先生（吉岡町立吉岡中学校）

15:40～16:00 講師、参加者との懇談会（質疑応答を含む）



大矢幸江先生

高橋一美先生

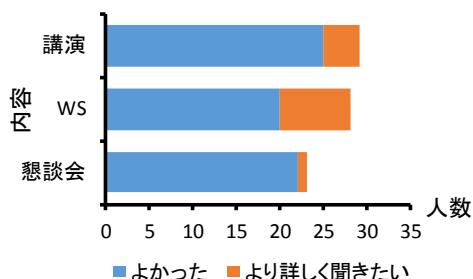
3：今後に向けて

和服の授業に対する自信のなさは、きもの離れの現代で当たり前という大矢先生の言葉にホッとする一方、本研修院や教員免許更新講習といった場を提供する重要性を感じた。また、高橋先生の具体的な教材づくりのノウハウは子どもとの関わり方にも通じ、「人間性」「生きる力」に直結すると感じた。

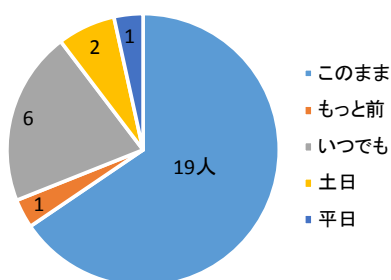
今年度のアンケート結果を掲げる。今後も勉強会を通じて、学び続ける教員を支援していきたい。

| | |
|------|-----|
| 参加者全 | 35 |
| 講師 | 2 |
| 運営 | 2 |
| 教員 | 12 |
| M1 | 2 |
| B4 | 6 |
| B3 | 2 |
| B2 | 9 |
| 回答数 | 31人 |

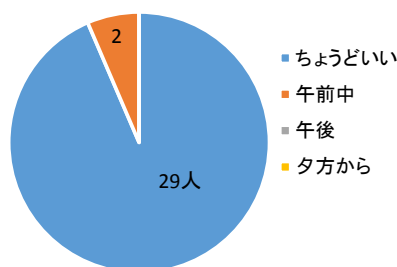
1. 今日の内容に対する感想



2. 日程・時期

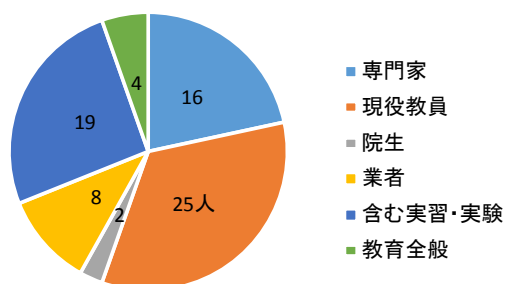


3. 時間帯

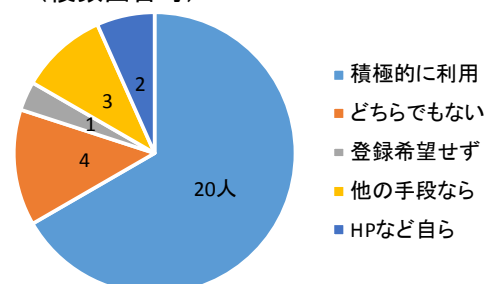


4. 開催場所の希望は「群大26名」、「前橋3名」

5. 今後、実施して欲しい内容(複数回答可)



6. 情報や案内の入手方法、ML登録について(複数回答可)



●自由記述欄より一部を紹介

- ・なるべく実験なども授業にとり入れたいが、住まいのところで有効な実験などありますか。
- ・活動がメインになると思うので、それらの紹介がたくさんあれば勉強になると思う。
- ・新しい指導要領で入ってくる高齢者への支援など、どの程度までやったほうがよいのでしょうか。
- ・家庭科は家庭で実践することがあるが、様々な家庭環境の子がいる時の配慮の方法を知りたいです。
- ・1人校なので授業の評価のとり方にとっても悩む。先生方がどのようにとっているのか聞きたい。

群馬大学教育学研究科長期研修院（障害児教育） 平成 30 年度活動報告

1：長期研修院（障害児教育）の概要

共生社会の形成をめざし、インクルーシブ教育システムの構築が展開されているなか、特別支援教育に携わる教員においては、医療・福祉機関との連携に基づいた教育を行うのみならず、地域の小中高の学校や通常の学級との連携や地域の学校への支援を実施することが求められる。つまり、特別支援に携わる教員は障害種別による専門性の向上に加えて、各種機関や学校との連携に基づいた教育・支援の実践的スキルが必要となる。

この実践的スキルを向上させるために、障害児教育講座では「オーダーメイド型長期研修」を実施している。研修員が学ぶ主たる障害種別の研修内容や研修員のニーズに応じた研修が構成できるようにしている。

2：活動実績

（1）活動実績の概要

平成 30 年度では群馬県内から 2 名の長期研修員を受け入れた。各自の研修テーマに沿いながら、①障害児教育講座で開講している授業の聴講、②特別支援教育に関連する学会の研究大会や実践研究会への参加、③複数のフィールドにおける実践観察を行ってもらった。

（2）各研修員の研修テーマならびに活動実績

①山崎美典（群馬県立伊勢崎特別支援学校）

研修のテーマ：巡回相談における生徒児童のアセスメントの視点と担任への助言についての実践研究～A町とB市の巡回相談の事例を通して～

A町とB市で行われている巡回相談に一年間同行し、見学時に観察した生徒児童の行動、相談員による担任への具体的な助言とその際の配慮事項、行動の背景と考えられる生徒児童の特性、担任自身の生徒児童に対する捉えを相談同行時の記録から、生徒児童ごとにまとめた。まとめたケースをさらに分類することで、巡回相談において、「生徒児童のアセスメントを進めるための観察時に必要な視点」、「実態から明らかになる手立ての構築」、「学校現場で生かせる担任への助言の仕方」の三つのポイントについて整理し、検証をした。

また、大学の講義や各研究会への参加、先行研究の調査、関係機関の見学などを通じて、主に発達障害に関する専門的な理論や実践を学び、特別支援学校のセンター的機能の充実を担うべく専門性の向上に努めた。

②佐藤啓子（渋川市立津久田小学校）

研修テーマ：数概念の形成に困難さのある子どもの算数の学習に関する研究

特別支援学級（知的）に在籍している児童を対象児として、繰り上がりのあるたし算において、数えたしではなく数を操作することによって答えを導くことができるまでの有効な支援方法について実践研究を行った。具体的には、課題分析表の項目をさらに細分化した学習課題確認表を用いて段階的に指導を進め、対象児がどこでつまづいているのかを明らかにした。さらに、指導場面における対象児の観察から、つまづきは対象児の認知特性に深く関わっていることがわかり、認知特性からくるつまづきの分析を踏まえた支援のあり方を構築することができた。また、大学の講義、研修会や巡

回相談への参加を通して、発達に偏りのある児童に対して指導者がどのように関わり支援をしていくべきかを学び、実際の指導に活かすことができた。有効だった支援方法、課題を分析することの必要性、指導者としてあるべき姿について考察し、研修のまとめとした。

3：今後に向けて

2名の研修員を中心に長期研修員の活動を展開したが、各自の研修テーマに関して深く研修を行う事ができた。このような研修員の数を限定した方法での一定の成果は認められる。大学の授業やゼミでの検討機会などの既存の資源や地域資源を活用しながら長期研修員の活動を展開することが有効であると考えられる。